

花粉症は炭やきの煙に弱い

■花粉症知らずの山の炭人たち

日本リサーチセンターの実態調査によると、平成17(2005)年の花粉症患者は日本の人口の26.2%に達した。毎年多くの人々を悩ませる花粉症は、かつて日本の山林で年間200万t以上の炭がやかれていた時代には、名前すら知られていなかった。昭和32(1972)年以降、エネルギー革命によって海外から安価な石油・天然ガス・石炭などの化石燃料が大量に輸入されるようになり、木炭の需要が激減して、国内生産量も最盛期の10分の1に減少した。

日本の秋の風物詩として童謡にも歌われてきた炭やきの煙や里の田畑でワラや籾殻を焼く煙が見られなくなったころを境に猛威をふるい始めたのが花粉症である。その因果関係を裏づける科学的な調査データは完全ではないものの、炭やきの煙が途絶えて花粉症が発生し、患者が年々増えているという社会現象は厳粛な事実で、炭やきの煙が花粉症を防ぐ天然のワクチンの役割を果たしていたと考えても不思議ではない。

■煙があるところは花粉症も避ける

花粉症が医学的に確認されたのは昭和63(1988)年で、スギ並木で有名な栃木県日光市の医師・斎藤洋三氏が鼻や目のアレルギー症状を訴える患者が春に急増することに気づいたのが発端である。花粉症の増加は戦後、国土復興のための建築用材として、スギ・ヒノキの植樹を優先した造林政策が一因という指摘もあるが、そのスギ林で働く人々が花粉症知らずの生活をしている事実にも注目したい。

かつて農山村の民家の屋根にカヤやワラが用いられていたころ、床には囲炉裏が切られていて、囲炉裏から立ちのぼる煙が天井の梁や柱はもとより、屋根のカヤやワラを害虫から守り、その耐久性を高めていた。煙に含まれる有機酸やフェノール系の成分などが単独または複合的に作用して防虫・防腐効果をもたらしていると考えられている。

近年、赤ワインやカカオ豆などに含まれているポリフェノールの抗酸化性が生活習慣病の予防に効果のあることが話題になっているが、いまから38年前、炭の権威・岸本定吉博士(故人)が、木酢液に含まれるポリフェノールの抗酸化性について林産学会で発表されている。その後の研究でも、木酢液・竹酢液が他のいくつかの含有成分との複合作用で、花粉症の症状を和らげるはたらきをするようだということが解明されつつある。

木酢液・竹酢液の愛好者には、原液を燻臭が苦痛にならない程度に水で薄め、直接、患部に噴霧するか、ステンレス製など、耐酸性のある容器に入れ、室内で加熱・燻蒸する方法を試みる人も多い。立ちこめる湯気が、ゼンソクや過敏性肺炎など、気管支系のアレルギー疾患を誘発する有害菌や有害カビを駆除するほか、花粉症の消炎効果があることも、こうした体験を通じて知られている。

木酢液・竹酢液には、花粉症用に市販されている抗ヒスタミン剤を服用したときの眠気や喉の渇きなどの副作用、ステロイド剤を用いたばあいの依存症を併発する心配もない。